

書写における学習環境の創造 ～「書写実技教育支援コーディネーター」の配置によって～

Creative Learning Environment in Shosha
— Depending on the Placement of “Practical Shosha Education
Support Coordinator” —

巢立 早希

Saki SUDATE

(本学大学院 美術教育専攻

平成23年3月修了生)

和田 圭壮

Keisou WADA

(美術教育講座)

(平成25年9月30日受理)

1 はじめに

本研究は、「書写実技教育支援コーディネーター」(福岡教育大学概算要求プロジェクトによる配置)が行う、小学校国語科書写における学習環境の整備について、①『書写室』の整備、②教具・教材開発、③書写ポートフォリオファイルの実践、という3つの視点で具体的な例を挙げ、その効果と今後の課題を述べる。特に、①『書写室』の整備については、近年の少子化によって空き教室が顕在化している状況から、その空き教室を活用した『書写室』の設置に意義があると考えている。

「書写実技教育支援コーディネーター」とは、いわゆる小学校専科教育の教諭に近い職種であるが、その専科教員のように書写の授業を一人で行うのとは違い、常にクラス担任とTTの体制で行い、授業及び授業前後において連携をとりながら行う事を目指している。つまり、望まれる充実した書写教育を、広く一般教員に普及させるということも担っている。TT体制により、クラス担任と「コーディネーター」のお互いの教育力を高め合い、より充実した書写の授業を子どもたちに提供できるのではないだろうか。本研究では、こうした「コーディネーター」の職務内容についても考察していきたい。

2 プロジェクトの概要について

2-1 プロジェクトの目的について

教師の苦手意識が「潜在的カリキュラム」として児童に悪影響を及ぼす例は多い。「潜在的カリキュラム」とは、正規のカリキュラム以上に、児童・生徒に影響を与える事柄のことで、特に、実技教科等では、教師の苦手意識による発言や態度・表情などが、児童・生徒の苦手意識を形成する要因となりやすい。このように顕在化しやすい実技に関する体系的かつ科学的な研究と教育システムの構築が急務であると考えられる。

平成23年度より、図画工作・音楽・書写の教科・分野において、小学校専科や各地の取り組みを調査・分析・検証し、より良い実技教育支援コーディネーターの養成と配置を進めている。本プロジェクトでは、教育現場での「実践知」(直接の経験に立脚して、暗黙の知識に基づく洞察を生み出し、その人の信念と社会的影響により形づくられる強力な専門的知識)習得による「潜在的カリキュラム」開発の効果を科学的に検証することで、図画工作・音楽・書写の教科・分野での教員養成カリキュラムの改善と学力向上を目的としている。

2-2 プロジェクト協議会について

本プロジェクトでは、「プロジェクト協議会」を立ち上げ、大学と各小学校での実践が有効に機能するべく、年間3回程度の協議会を設け、連携を図っている。その構成は、本学の担当理事、担当事務、そして美術教育講座(図画工作・書写担当)・音楽教育講座(音楽担当)・技術教育講座(図画工作・科学的検証担当)からそれぞれ担当教員2名ずつ、そして本プロジェクトを実践する小学校の校長・教頭、市教育委員会の理事・指導主事である。

この協議会によって、プロジェクト内容の確認、コーディネーターの役割や配置、予算等の大枠を決定している。

2-3 これまでのプロジェクトの状況について

本プロジェクトに先立ち、平成22年度において、本学のプロジェクト推進経費(教育改革支援プロジェクト)によって、概算要求のための基盤研究を行っている。そして、平成23年度から25年度までの3年間、文科省概算要求特別経費として予算措置がなされることになった。

平成 22 年度は、A 小学校において、図工 62 日間、書写 16 日間、卒業生および大学院生を配置し、コーディネーターとしての成果と問題点を抽出した。

この取り組みを受けて、23 年度には、同じく A 小学校において、図工が週に 2 日間、音楽が週に 2 日間、書写は週に 4 日間を大学院生および院修生を配置したが、どの教科・分野においても、コーディネーターとクラス担任の関わり方について大きな課題が残された。まず、一つ目に、専科教員に起こりがちなことで、クラス担任がコーディネーターに授業を完全に任せきりにしてしまうことである。二つ目に、コーディネーターが若い人材であることから、学生ボランティアのような感覚でクラス担任や学校全体の雑務に時間をとられたことである。

こうした課題を基に平成 24 年度からは、3 校（N 小学校、J 小学校、G 小学校）において実施することになり、3 月末に、コーディネーターの役割と科学的検証について把握していただくため、大学側から説明を行った。また、コーディネーターについても、教員経験者や GT として参加されてこられた方にもお願いすることになった。

書写分野においては、各クラスにおいて授業を行う際、開発した教材・教具の準備と片付け等に時間がかかりすぎるという課題が残った。そのため、平成 24 年度には、空き教室を利用した「書写室」の開発を検討した。科学的検証については、平成 25 年度途中からの実施であり、今後の研究課題である。

3 研究拠点校（3 校）での実施状況について

3-1 各校のコーディネーター配置前の状況

書写は特に毛筆の指導において教員の実技力が求められるため、福岡県では地域の人材を GT として活用し、担任は敬遠する状況が多くみられる。その為、本来求められる学校教育としての書写ではなく、作品主義の習字塾と同じような毛筆作品づくりのみの学習と

なっていることが多い。研究拠点校でも、そのような状況が見られた。また、1 年間に 30 時間程度と定められている授業時間数の半分にも満たないのも現状であった。

3-2 書写実技教育支援コーディネーターについて

平成 24 年度から、福岡県宗像市の小学校 3 校にコーディネーターを配置し、月に 1 回、情報共有・書写教育の理解を目的にして勉強会を行いながら、実践を行った。以下の表に、その配置状況と役割についてまとめている。

4 学習環境について

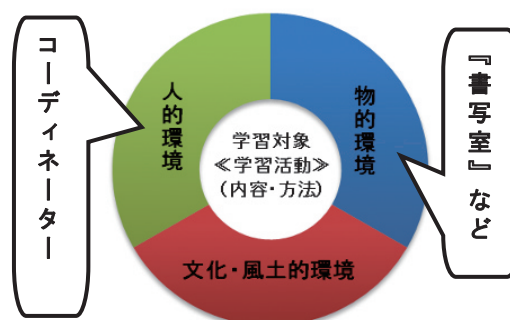


図1 学習環境の構造図

子どもが生きる主体的な学習には、〈図1〉に示しているような学習環境がある¹⁾。これらの学習環境は、子どもの資質・能力を発揮し高めていく大切な学習環境であり、子どもが常にかかわっていく「学習対象」をいろいろな面から援助してくれるのが「人的環境」「物的環境」「文化・風土的环境」である。

従って、「人的環境」として「書写実技教育支援コーディネーター」が配置され、その結果、可能となった『書写室』や教具・教材開発等は、学習環境として重要な「物的環境」の1つであり、書写において

	N 校	J 校	G 校
人員	1 名	2 名	1 名
プロジェクト参加前の経歴	●福岡教育大学大学院出身 ●一昨年度からこのプロジェクトに加わり、実践を行う	●九州女子大学出身 ●自宅で習字塾を運営 ●宗像市内の小学校で約 10 年間書写の GT を行う	●福岡教育大学出身 ●自宅で習字塾を運営 ●福岡教育大学出身 ●地域の公民館で習字塾を運営 ●小学校講師の経験あり ●宗像市内の小学校で書写の GT を行う
勤務日数	週 5 日 (7.75 時間 / 1 日)	週 1 日 (7.75 時間 / 1 日)	週 2 日 (7.75 時間 / 1 日)
担当学年	第 3・6 学年	第 3・6 学年	第 4・5 学年
役割	理想的な『書写室』の整備 適切な評価基準の策定 (ワークシートの作成) 大学が開発した教材の実践 学校教育における書写の授業実践研究	普通教室での実践 学校教育における書写の授業実践研究	現実的な『書写室』の整備 学校教育における書写の授業実践研究

様々な可能性を高めるものとなると考える。また、常にTT体制での授業は、「人的環境」として、一人ひとりの子どもがより確かに学習を進め個性を十分に伸ばしていくことができるように、学習環境をよりよいものに整えていく営みとなる²。

5 『書写室』の整備 ～N校での実践～

5-1 『書写室』設置前の状況

近年は英語活動室として使用されており、平成24年度4月直前は物置になっていた状況であった。教室の大きさは、普通教室と変わらない。

5-2 『書写室』設置にあたって

『書写室』の設置にあたっては、以下7つの観点を設けた。

●観点①…学校に余っている机と椅子の使用

『書写室』の設置に際し、新規では経費がかかり提案しにくい。従って、空き教室がある学校なら、どんな学校にでも『書写室』を提案することができるよう、この観点で整備を試みた。

●観点②…『書写室』使用の対象は毛筆書写の授業が始まる第3学年から第6学年

この観点では、身長差が考えられるため机や椅子のサイズが重要である。《図2》のように、前から順に低

学年用から高学年用のサイズまでを観点①の下で配置した。子どもたちは、どのクラスも《図2》の番号順に背の低い子から順に座る。机・椅子の配置も、決して広くはない普通教室を有効に使える配慮を行った。

●観点③…毛筆学習において正しい姿勢を保持できる適切なサイズの机と椅子の関係

通常子どもたちが学級で使用している机は、肘を机から離して書く毛筆学習において、高すぎるという状況が見られるため、全体的に低めの机を多く整備した。また、通常は机と椅子の号数をそろえる所を、《図2》でも分かるようにあえて椅子の高さが通常より高くなる座席を多く配置し、望ましい姿勢で毛筆学習ができるようにした。

●観点④…グループ活動による言語活動を積極的に行える机の配置

今日の学校教育において、言語活動が重要視されていることを受け、この観点を導入した。《写真1》《図2》《写真2》でも分かるように、常に3人グループでの席の配置で、言語活動を取り入れた授業が行いやすい配置としている。また、黒板に背を向ける子がいないよう、U字型の配置とした。

●観点⑤…多様な学習活動が可能となる机上の工夫

書写の学習は、用具で机上がいっぱいになるため、各机にブックエンドを取り付けた。このブックエンドには、基本的に個々のめあての書かれた学習プリントを挟ませる。そのようにすることで、子どもたち自身もめあてを確認しながら練習ができ、教師側も机間指導の際にその子に応じた指導ができる。(《写真3》) また、学習の前半で行う試し書きを紛失防止のために、



写真1 『書写室』設置後

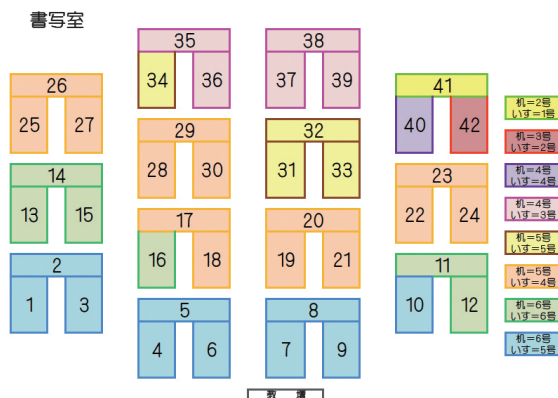


図2 『書写室』の机・椅子の号数と配置状況



写真2 グループ活動の様子



写真3 ブックエンドの様子

挟んで保存させておいたり、グループ活動の際の相互評価カードを挟ませたりと、多様な学習活動が可能となる。

●観点⑥…片づけにおける環境の配慮

平成23年度までは、書写の授業内には、最後まで片づけを行わずに、用具の状態を悪くする子が多く見られた。従って、全ての片づけを『書写室』で行えるよう、グループごとにゴミ袋を設置したり、個々にトイレットペーパーを設置したりしている。このようにすることで、片づけ時に、席の移動もなく、自立して最後まで活動ができることを目指している。（《写真4》）

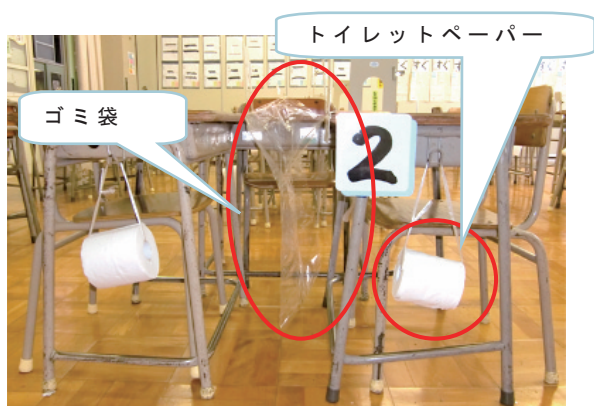


写真4 片づけにおける環境の配慮

●観点⑦…視覚的環境の充実

毛筆書写の授業は、準備・片づけを始めとして、どの教科よりも活動の多い授業である。毛筆書写の授業を初めて行う第3学年にとって、活動の1つ1つをスムーズに行うことだけでも大きな課題である。これらの活動の効率化を図るために観点⑦を設けた。《写真5》は、『書写室』前方の壁である。ここには、準備（用具の置き方）・筆の持ち方・姿勢・片づけの仕方という毛筆書写において基本的なものを視覚的に掲示している。

また、『書写室』後方の壁には、学習内容の振り返りや子どもたちの試し書き・まとめ書き・学習プリントをまとめて掲示できる授業のフィードバック空間を整備している。（《写真6》）このようにすることで、個の成長・上達を共有することができる。

その他にも、『書写室』内や廊下には、「書写コーナー」を設けている。（《写真7》）

5-3 『書写室』の整備における成果と課題

成果としては、大きく2つあげられる。

その1つは、書写に特化した机の整備・配置や机上の工夫により、書く際の望ましい姿勢や、個に応じた指導、積極的なグループ活動・言語活動が可能となり、授業内容自体の充実を図れることである。

もう1つは、書写に特化した視覚的環境が常に整備

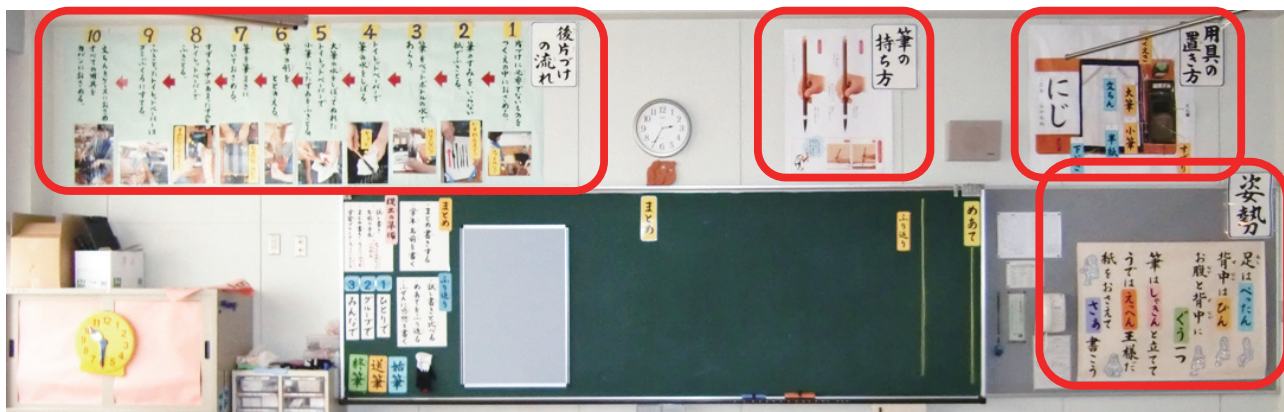


写真5 『書写室』前方の壁



写真6 『書写室』後方の壁



写真7 書写コーナー：基本点画の名称クイズ

できることで、特に準備・片づけなど書写の授業において本来付属的な活動がスムーズに行えるようになったことである。このことで、授業内容自体の時間を増やすことができるようになり、さらに充実した学習が見込まれる。このことは、特別支援の必要な子や活動がスムーズに行えない子への自立への助けともなっている。

課題としては、大きく2つあげられる。

1つ目に、観点①の限られた状況下での設置であるため、今回の整備では大きく問題にはなっていないが、机・椅子の数やサイズの点では十分な配慮が行えない場合も考えられるということである。

また、2つ目に、観点⑤により、ブックエンドを固定設置したため、グループ活動を行う際に視界の妨げになってしまうことがあるということである。

6 教具教材開発

6-1 筆使い習得のための補助教具

《写真8》のように、スチレンペーパーを基本点画の形に切り、穂先の通る所に印を付けたものを、筆使いの練習に使用する。子どもたちは水書きシート上でこの補助教具を使って穂先の位置、太さによる力の入れ方の違い等を確認しながら練習し、筆使いを習得する。

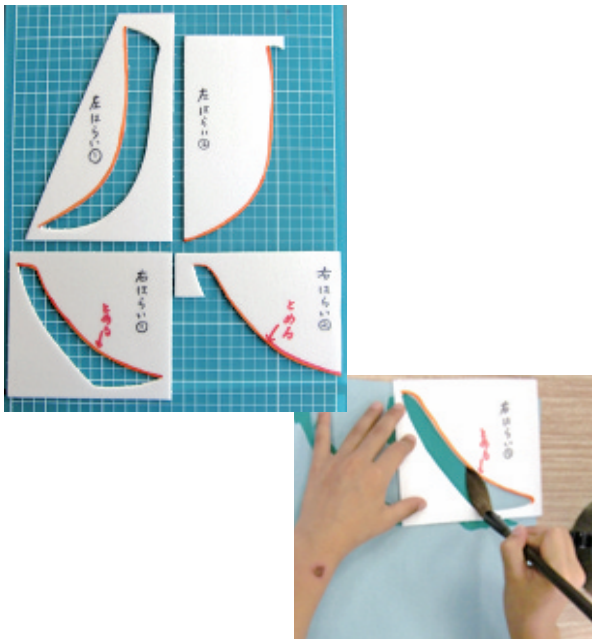


写真8 基本点画補助教具

成果としては、大きく2つあげられる。

1つ目に、子どもたちが積極的に活動を行えるということである。子どもたちは、この教具や水書きシートに興味をもち、積極的に練習していた。また、この水書きシートを使用することで、水で練習ができ、教具も汚れることなく1クラス分用意しておけば繰り返

し使用できる。

2つ目に、子どもたちの上達につながるということである。特に、第6学年の“道”、第3学年の“大”など、筆使いの最も難しいと思われる“右はらい”の含まれる毛筆課題において有効で、《写真9》のように大きな変化をみせる子も見られた。これにより、技能的に中間層の子どもたちの底上げになり、子どもたちの達成感にもつながっていた。



写真9 成果

課題としては、この教具作成に手間がかかること、スチレンペーパー・水書きシート等に経費がかかることである。

6-2 その他の教具

始筆の角度を示す時計や、空書きをする際の手袋など、学習意欲が高まるような教具・教材を開発中である。（《写真10》）



写真10 始筆時計（左）、空書き手袋（右）

7 ポートフォリオファイルについて

一般的な掲示の仕方では、次の3点に問題があると考えた。

- ①児童の作品が糊によって傷ついてしまい、複数枚重ねていくと、下の方の作品の上部が見えなくなる。
- ②試し書きを保存できず、児童個人の上達の様子が残らないので、達成感につながらない。
- ③振り返りや、フィードバックがしにくい。

こうした問題点を受けて、100円均一ショップのクリアファイルを活用したポートフォリオファイルを実践している。このファイルに試し書き・まとめ書き・学習プリントが一式収められ学習の軌跡が残るように

なっている。このポートフォリオファイルを使用することで、3つの問題点も解決でき、授業中に以前の授業を振り返ったり、作品1つ1つに書くコメントも子どもたちの目に触れることが多くなり、フィードバックできるようになった。

8 TTでの実践について

平成23年度には、TTとしての効果が望まれない授業状況が日常化してしまったため、平成24年度は、このTTのあり方を積極的に考え、実践を行った。日頃の授業では、〈表1〉のような割合で役割を分担し、基本的には、コーディネーターがT1、クラス担任がT2という形で授業を行う。

表1 クラス担任とコーディネーターの役割分担

	クラス担任：コーディネーター
授業準備	1：4
学習規律	4：1
技能面	1：4
授業進行	2：3
机間指導	2.5：2.5
授業後評価	2：3

また、TTでの授業のメリットとして、次の4つがあげられる。

●メリット①…充実した書写学習の提供

授業準備については、クラス担任に比べて時間を確保でき、専門的な知識や技能をもつコーディネーターが行う。そのようにすることで、教材研究の深さが見込まれ、教具・教材作成についても充実したものにすることができる。また、クラス担任とコミュニケーションをとりながら、子どもの実態や能力に合うことを目指している。

そして、授業を行う上で大切な学習規律は各クラスで異なるので、クラス担任が主となって行う。授業進行はコーディネーターが主となって行うが、発問に対する指名はクラス担任が行う。これは、日頃の発表の状況や個々の性格を考慮して授業を進めていくためである。以上の分担により、メリット①につながることを目指している。

●メリット②…個々に応じたきめ細かい指導

授業中の机間指導は必ずクラス担任とコーディネーターで一緒に行う。そのようにすることで、個々に応じたきめ細かい指導ができる。日頃の様子や性格を熟知した担任とのTTの体制をとることで、よりこのメリット②が充実したものとなる。また、技能面ではコーディネーターが範書での一斉指導や個々の手を取っての個別指導を行う。

●メリット③…複眼的・多面的視点

授業後評価については、日頃の授業作品や学習プリントへのフィードバックは基本的にコーディネーターが行い評価している。しかし、学期末の成績を作成す

るのは担任となるため、日々つけていた評価表を渡しコミュニケーションをとりながら、それも踏まえて評価してもらう形をとっている。このようにすることで、クラス担任の固定観念で評価することもなくメリット③につながる。これは学習面だけでなく、日頃の生活指導においても可能となるよう日々担任とのコミュニケーションを心がけている。

●メリット④…中学校の教科担任制への円滑な接続

研究拠点校では、本プロジェクトにより派遣されている音楽・図工・書写のコーディネーターを除いて、日頃は子どもたちが学級担任以外の授業を受ける機会は、英語活動のALTの先生以外ほとんどない。従って、完全教科担任制となる中学校との学習環境差が少なくなり、「中1ギャップ」の問題が解消されるのではないかと考える。

9 研究拠点校へのアンケート調査について

5～8で述べた学習環境に関する実践について、研究拠点校の先生方にアンケート調査を行った。その結果の一部が下の表である。

1. 物的学習環境（書写室、教具・教材、書写ファイルなど）について、どのように感じていますか。	
良い点	課題点
掲示物を作成・掲示してもらったことで、子どもの学習環境が整えられると共に書写への興味・関心・意欲の向上にもつながったと思います。視覚に訴える教具が工夫されていて、特別支援の視点からもとても効果的で、書写室の机の配置もとてもよいと思います。	教室のスペースがもう少し広ければいいと思うことと、机が広ければ…と欲が出ますが、これは校内事情でどうにもならないかと思っています。
2. 書写の授業(TTでの授業のあり方を含む)について、どのように感じていますか。	
良い点	課題点
担任教師が改めて、授業の進め方や指導法・手立ての工夫等について、見直す貴重な機会・経験となっています。それぞれの特性に合う部分を分担し合っているのが、子どもにとっていいと思います。	担任を持っていると、日々の多くの授業に追われて、こんなに準備ができませんが、打合せや指導の仕方等で、困っていることがあるのではないかなと思います。そこを十分にフォローできていないところが申し訳ないです。
3. 小学校の書写教育において書写コーディネーターのような専科教員は、必要だと思いますか。	
非常に必要	具体的にどのような点でそう思われましたか？
	授業の質的向上を図るために必要である。担任教師だけでは指導が十分でない専門的な技術の指導が適切に行える。2人で指導することで1人に関わる時間が多く持てる。たくさんの目で見ることで、良さをたくさん発見できる。

4. 今後の授業・学習環境・コーディネーターについて、ご意見・ご指導・ご感想等ございましたらご記入お願い致します。

掲示物（教室）や板書掲示、教具など有効なものもたくさん見せて頂きたいへん参考になっています。専科教員の必要性を今回のことで、強く思いました。2年間といわず、できる限り本校でのご指導を継続していただけたら、もっと素晴らしい本校での書写教育・専科教員を活用した授業が充実したものになると実感しています。これからご指導よろしく願いいたします。

全体的な考察としては、このプロジェクトに対して肯定的・積極的な意見が多かった。特に、授業の質的向上が望めること、子ども・教師両者にとって教育的効果が高まることを、研究拠点校の先生方はとても実感されていることが分かった。また、担任の先生は実技教科まで準備が行き届かない状況がうかがえたので、それを補うだけでなく、それぞれの特性に合った役割分担をして子どもたちにより良い教育を提供することが必要であろう。

また、今後の課題として大きく2つあげられる。まず、教室・机の大きさの問題である。既存のものを使う以上解決は難しいが、特別に『書写室』のために新規設置することになれば、これら問題について考慮する必要がある。

次に、授業の事前打ち合わせの問題である。特別に毎回時間をとって行うのは難しいと感じているため、日頃のコミュニケーションの中で、よりよい授業のあり方をコーディネーター側が積極的に相談し進めていくことが最善策だと感じる。しかし、週に1・2回の

勤務の場合、その時間も限られるため、コーディネーターの勤務形態に合わせた打ち合わせ方法をとる必要がある。

10 おわりに

現在、福岡県下の学校における実技教科は、国語科書写に限らず、学習指導要領の理念には程遠い学習状況があると感じている。

書写でも、ただ書くだけの毛筆完結型の作品主義の授業が顕在化している。また、授業時間数も定められた時間数を確保できていないのが現状である。このような状況を改善するために、まず専門的な知識や技能をもつ「実技教育支援コーディネーター」のような「人的環境」を整え、学習指導要領上の本来の書写のあり方を、積極的に現場へと普及させていかなければならない。そして、小学校段階では、専門性だけではなく、日頃の子どもの様子や個々の性格を熟知したクラス担任の存在も大変重要であるので、常にTTの体制をとり、協力してお互いの教育力を高め合うことで、より充実した書写の授業を子どもたちに提供できるのではないだろうか。

また、その上で、前述のとおり、『書写室』をはじめとする様々な「物的環境」を整えることで、文字を正しく整えて書けることだけではなく、考える力、言語活用能力、自立心など、様々な力を身に付けさせることのできる国語科書写へと可能性を大きく広げることができると本研究によって確信するに至った。

¹ 福岡教育大学教育学部附属久留米小学校著『子どもが生きる学習環境』 明治図書 1997

² 加藤幸次／佐久間茂和編『「生きる力」を育てる新しい授業 No.2 学習環境の創造』 教育開発研究所 1997

加藤幸次／浅沼茂編著『シリーズオープンスペースの活用 第3巻 学習環境づくりと学習材の開発』 明治図書 1987

青山敦子「特集 教科担任制を積極的に導入（広島市立袋町小学校）」『内外教育』 時事通信社 2008

嶋公治「特色ある学校を訪ねて 兵庫県小学校の新たな指導システム」『初等教育資料平成22年10月号 No.865』

東洋館出版社 2010

佐藤信男「小学校高学年による教科担任制の取組（宮城県登米市立佐沼小学校）」

『初等教育資料 平成22年10月号 No.865』 東洋館出版社 2010

上原悟「特集 教科指導 小学校における教科担任制の効果と課題」『教育ジャーナル 2007 2月号』 学研出版 2007

岡野昇「新しいタイプの学校運営の在り方に関する実践研究（第2年次）」

『三重大学教育学部研究紀要 第56巻 教育科学』 2005

奈須正裕「小学校教科担任制の可能性と課題」『教育と医学 56 (3)』 慶應義塾大学出版会 2008

向山行雄「小学校における教科担任制の試み」『学校経営』